

## 保育系学生のための英語

青嶋 由美子

### I. はじめに

2020年度より施行される新学習指導要領では、小学校5～6年生において英語が「教科」として扱われ、小学校3～4年生については「外国語活動」が必修化される。これまで、小学校5～6年生で「外国語活動」を行っていたが、対象学年が前倒しされる形となる。また、大学入試改革でも、英語能力に関して「読む・聞く」だけでなく「書く・話す」も含めた四技能を測るものへと舵が切られた。これからの時代を生きる子ども達に望まれる英語力の在り方が鮮明に示された形である。小学校では、既に2018年度より移行措置が取られており、グローバル化に対応出来る英語力を持つ児童の育成が前面に押し出される教育内容となってきた。

このような小学校での学習内容の変化は、就学前の幼児の環境にも影響を与えてくる。子どもが就学した後、学習についていけるか、場合によっては進度が他の子どもよりも先んじているかが、保護者にとっての大きな関心事となるためである。従って、小学校で学習する内容について、幼稚園・保育園・こども園で事前に経験させておきたいという保護者の希望も高まってくる。このようなニーズに応えるべく、英語遊びや英会話の時間を、正規の保育時間内や課外講座として取り入れる園が増加している。ここ愛知県東三河地域でも、全ての保育を英語で行うプリスクールやインターナショナルスクールを名乗る保育施設が誕生している。ネイティブの英会話講師が、幼児に楽しく使える英語を伝える時間が多くの園で持たれているのである。朝日新聞が取り上げた小規模保育所でも「認可保育所としては珍しく、毎日、外国人の英語講師が訪れ、英会話に触れる時間もある」<sup>1)</sup>とされ、毎日新聞では千葉県松戸市の公立園でもネイティブ講師による「英語遊び」が行われていることが紹介されている。<sup>2)</sup> このように、以前は幼稚園で取り入れられることの多かった早期教育としての英語は、民間保育所のみならず公立の保育所でも導入されているのである。

さて、本学で保育者を目指す学生の多くは、入学当時から英語に対する抵抗感を強く持っている。本学では、幼児教育・保育科の学生は、英語を1年次の秋学期に履修するのだが、秋学期開始前に、「英語は苦手」「英語は嫌い」「英語の授業があるのがとても憂鬱」「高

1) 日高奈緒 朝日新聞「学び始め「乳幼児」から」2018年11月29日 朝刊35面(社会面)。

2) 毎日新聞「英語遊び 公立園でも「より早く」意識」2017年2月1日

<https://mainichi.jp/articles/20170201/k00/00e/040/255000c> アクセス日2018年12月1日。

校まで英語で良い点を取ったことは一度も無い」等と訴えてくる学生が非常に多い。しかし学生達の多くは、卒業後は保育者として現場に出ていくのである。中学・高校までの英語とは全く異なるものの、英語や英会話の時間が保育に組み込まれている現場が多くなってきている今、学生達が抱えている英語に対する否定的感情を除去しておくべきであろう。そのように考え、学生が楽しむことが出来、現場に出た際に、子ども達と一緒に英語を楽しめる素地を作りたいと思い、英語の授業内容を変更してきた。以前は講読中心で、長文の英語を正しく読解する力を養成することを、授業の目的としていた。しかし、試験前に日本語訳を丸暗記している学生の姿に疑問を抱いたことも、変更の一因である。

現在、英語の授業は1コマを三つのパートに分けて内容を変えながら進めている。

まず、最初の区分で、英語の諺・格言、就職試験対応の英語読解問題、保育現場に関連する英語の演習問題等を学ぶ。演習問題では、献立を英語で表すとどのようになるか、保育室や園庭にあるものを英語で何と言うか、子どもの健康状態を英語で説明するために必要な表現はどのようなものか等を扱っている。

第二の区分では、ナーサリー・ライムを通して、自然な英語の流れや発音を学習している。歌は、英語のイントネーションやアクセントを学ぶために最適な教材となる。だが、発音上の注意を多くすると、その発音を身に付けられなかった際に学生の得る達成感が損なわれるため、まず確実に発音出来るようにする音は一つの曲につき一つとしている。学習に対して余裕がある学生は、その他の部分も注意を払うように伝えているが、基本的には一つの歌について一つの発音をマスターすることを目標としている。さらに、英語を英語らしく聞こえるようにするため、英語の音声上の現象を三つ理解してもらえるようにしている。その三つとは、音の連結・音の同化・音の脱落である。この三つは、話言葉としての英語の特徴であるが、同時に英語を聞き取りにくくする要因でもある。

まず、音の連結である。この現象は、英会話において、単語と単語がつながって発音され、二つの単語があたかも一つの単語のように聞こえることを意味する。発生する時は、前の語の末尾の通常発音されない子音の後に、「母音で始まる単語」が続いた場合であり、この時子音と母音を連結して発音する現象となる。この音の連結は、単語が2語続く場合だけではなく、3語や4語で続いていても、それが意味上一つの単位をなしている場合には、音を繋げて発音する形で起きる。例として、次のようなものが代表的であり、下線部を切らずに繋げて発音する。

例) far away, more and more, in English, open up, come in

次に、音の同化である。これは、隣り合った二つの音が互いに影響し合って、それと全く同じ音にしてしまうか、または似通った別の音にしてしまう音声現象を意味している。

例) [t] + [j] ⇒ [tʃ] 例) won't you don't you can't you meet you

[d] + [j] ⇒ [dʒ] 例) could you did you send you would you

[s] + [j] ⇒ [ʃ] 例) miss you bless you

[z] + [j] ⇒ [ʒ] 例) tells you as you

三つめは、音の脱落・消滅である。これは、[b][d][g][k][p][t]等の破裂音が句末や

文末に来た場合、一方の音が他方の音を完全に同化して、自音の中に吸収してしまい、元の音がほとんど聞こえない場合に起きる現象である。また、破裂音が語尾に来る場合、口の形はその音を発音するように動いているのだが、音としてはほとんど聞こえてこない音の消滅も非常に起きやすい。ただし、音が完全に消えてしまうわけではなく、日本語の促音（「ッ」）に似た息の詰まったような状態となる。さらに、同じ破裂音が連続して発音される場合にも、片方（特に前）の子音がよく脱落する。

例) Good day! Sit down, a good deal, a blind man<sup>3)</sup>

第三の区分では、英語図鑑の制作を行っている。子どもの身の回りにあるものを、野菜・果物・乗り物・色・形・花等のジャンル別に、英単語とイラストを用いて各自、自分の個性を表出出来るような作品に仕上げてもらっている。全体を通して一冊の英語図鑑として使えるものとなる。

以上のような三つの内容を組み合わせて授業を展開しているのだが、今回は、その中からナーサリー・ライムの部分を取り上げてまとめていく。教科書として使用しているのは、『子どもとうたおう！マザーグース』（アルク）である。なお、nursery rhymesとMother Goose rhymesについては、「わらべ唄/伝承童謡/ナーサリー・ライム/マザーグースの唄」という訳語が該当し、「大人が幼い子どもたちに口ずさんだり歌ったりする詩、または唱え唄。なぞなぞ、子守歌、有名な歌の一部、ノンセンスを使って、子どもをなだめたり楽しませたりする」<sup>4)</sup>ものとして、ナーサリー・ライムとマザーグースを同一のものとしている。だが、「英語圏の伝承童謡をマザーグースと呼ぶのはアメリカで、イギリスではナーサリーライムという」<sup>5)</sup>としているものもある。今回、筆者は前者に従い、ナーサリー・ライムという語を使用する。

## II. 授業で取り上げているナーサリー・ライム

この章では、授業で学習している曲についての概略を示していく。

### A. Mary Had a Little Lamb

#### i 曲の概説

日本でも「メリーさんの羊」として良く知られている歌である。

オーピー夫妻は、この曲について「E. V. Lucasは、これらが英語で最も良く知られた四行詩であると結論付けた。これらは、ボストンに住むMrs. Sarah Josepha Haleによって1830年始めに書かれ、部分的には真実の出来事であった。1830年9月に出版された」<sup>6)</sup>と述べており、Mother Gooseと括られる童謡の中では、発表時期と作者が分かっている珍しい作品である。「エジソンが1877年に最初に蓄音機に吹き込んだ言葉としても有名」<sup>7)</sup>という指摘

3) 音の連結・音の同化・音の脱落については、三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』（英宝社、初版1971、1976）71-77頁、松澤喜好『英語耳』（アスキー、初版2004、2005）100-107頁、菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』（アルク、1993）56-60頁を参考にまとめていく。

4) ハンフリー・カーペンター、マリ・ブリチャード（神宮輝夫・監修）『オックスフォード世界児童文学百科』（原書房、1999年）、959頁。

5) 定松正・本田英明『英米児童文学辞典』（研究社、2001年）、261頁。

6) Iona and Peter Opie ed., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Oxford University Press, 1951, 1985, p.206.

7) 藤野紀男・夏目康子『マザーグース・コレクション100』（ミネルヴァ書房、初版2004年、2012年）、277頁。

からも、人口に膾炙していた曲であることが分かる。

元々の形は、Mary had a little lamb, / Its fleece was white as snow / And everywhere that Mary went / The lamb was sure to goの4行で第1連を為しているが、歌は、2行単位で連を作っており、1番は第1連の1行目を3回繰り返したのちに2行目を歌い、2番は第1連の3行目を3回繰り返して4行目を歌うという形になっている。そのため、詩の方は全体では4連で構成されているが、歌は8番までである。<sup>8)</sup>

なお、殆どのMother Goose集には、4連で書かれているが、実際に発表された際には、Then it ran to her and laid / Its head upon her arm, / As if it said, "I'm not afraid / You'll keep me from all harm," が第3連と第4連の間に、"And you, each gentle animal / In confidence may bind, / And make it follow you at will, / If you are only kind." が最後に入り、全体で6連構成の詩となっていたそうである。<sup>9)</sup>

## ii 授業で取り上げている歌詞

Mary had a<sup>①</sup> littl<sup>②</sup>e lamb<sup>③</sup> / littl<sup>②</sup>e lamb<sup>③</sup>, littl<sup>②</sup>e lamb<sup>③</sup>,

Mary had a<sup>①</sup> littl<sup>②</sup>e lamb<sup>③</sup> / Its fleece<sup>④</sup> was<sup>⑤</sup> white<sup>⑥</sup> as snow<sup>⑦</sup>

## iii 歌う際の注意点

①は、弱勢になっている had に母音の a が続き、音を連結して発音することになる。単語の最後の音が子音で、その後に母音で始まる単語が続く場合に起きる現象であり、この現象をリエゾンと呼ぶことも説明している。

習得すべき発音は、②の【l】である。日本人には発音が難しいとされる【l】であるが、これは日本語の音声の中にこの音が存在していないためである。また、綴り字のlが単語のどの位置に存在するか、アクセントのある母音と共に音を出すかで、clear【l】とdark【l】の二種類の音があるため、発音がさらに複雑となるように感じられる。実際は、前後に在る音によって自然と区別はつけられる。指導のポイントは、舌先を上歯の裏側にくっつけ、下の両側から息を出す点である。<sup>10)</sup> 筆者は、フォニックスの研修会で、ピーナッツバターが歯茎に付いてしまった時に舌を使ってそれを取り除くイメージで舌を当てるというpeanut butter【l】という説明を受けたことがあるので、その例も出している。

8) 4連の詩として発表されたものは、以下である。

Mary had a little lamb, / Its fleece was white as snow;  
And everywhere that Mary went / The lamb was sure to go.  
It followed her to school one day, / Which was against the rule;  
It made the children laugh and play / To see a lamb at school.  
And so the teacher turned it out, / But still it lingered near,  
And waited patiently about / Till Mary did appear.  
Why does the lamb love Mary so? / The eager children cry;  
Why, Mary loves the lamb, you know, / The teacher did reply.

Iona and Peter Opie ed., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, pp.341-342より引用。

9) 藤野紀男『マザーグースのミステリー』（ミネルヴァ書房、2009年）、92-93頁。

10) 三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』43-44頁、松澤喜好『英語耳』51-52頁、菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』48頁を参考にまとめてある。

また、③で黙字についても説明している。綴りとして存在していても、実際には発音しない音である。mに続くbは、黙字となる。

④fleeceでは、最後の音は【s】である。この音は、鋭く息の出る音だけであり、有声音としては耳に残らない。

⑤wasは弱形での発音となるため、最後の音までははっきりと出さない。

⑥whiteの最後の音は【t】であり、ゆっくり話す場合には発音されるが、早く話す場合に抜け落ちたり、聞こえなくなったりすることが多い。この現象を「音の脱落」と呼ぶことも伝えている。

⑦as snowであるが、ここは、同じ子音が連続する時は二つ目だけを発音するというルールに該当する。【s】【z】は別の音であるが、舌の動きが同じであるため、同じ子音に当て嵌まるルールが適用されての発音となる。

④～⑦により、Its fleece was white as snowの箇所は「イツ フリ ワ ホワイ ア スノウ」のように歌う。

## B. Pease Porridge Hot

### i 曲の概説

えんどう豆を煮込んだお粥の歌である。「熱いお粥、冷めたお粥、九日間もお鍋で煮込んだお粥」「熱いのが好きな人も、冷めたのが好きな人も、九日間煮込んだのが好きな人も居る」という不思議な歌詞となっている。

オーピー夫妻は、寒い日に子どもが手を温めるために行う遊び歌だと紹介している。また、1番の歌詞に続いて、“Spell me that without a P, / And a clever scholar you will be”

(Pの文字を使わずにあれ(=pease porridge)を書いてみて。出来たら君は賢い学者・訳筆者による)という謎々がつくこともあると、次の項目で取り上げ説明している。<sup>11)</sup>

なお、peaseは古英語であり、現代ではpeasと綴る。発音は【pí:z】である。

ヴァリエーションとして、Pease Pudding Hotと歌うものもあり、海外のwebサイトでは動画が散見されている。

### ii 授業で取り上げている歌詞

Pease<sup>①</sup> porridge hot<sup>②</sup>/ Pease<sup>①</sup> porridge cold<sup>③</sup>

Pease<sup>①</sup> porridge in the pot<sup>②</sup>/ Nine days old<sup>③</sup>

Some like it<sup>④</sup>hot<sup>②</sup> / Some like it<sup>④</sup> cold<sup>③</sup>

Some like it<sup>④</sup>in the pot<sup>②</sup> / Nine days old<sup>③</sup>

### iii 歌う際の注意点

授業で注意している点は①～④の四箇所である。

まず、①であるが、これは発音上の注意である。綴り字はseであるため、濁らずに発音し

11) Iona and Peter Opie ed, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.206.



たくなるが、発音記号としては【z】で表される。ただし、かなり弱めに音を出す。

発音で習得したいのは②【t】・③【d】で、同一の音の出し方をする破裂音である。

【t】は声帯の振動を伴わない無声音、【d】は声帯の振動を伴う有声音である。共に、舌先を尖らせるようにして上歯の裏側に押し当て、舌を弾きながら息を強く短めに吐き出して音を作る。【t】に【i】の音が続く場合は、日本語の「チ」の音になってしまうことが多いので、注意を払う必要がある。<sup>12)</sup>

④like itでは、二つの単語の間でリエゾンが起きる。また、itの【t】は、語末の破裂音であるため、音が消滅しやすく本来の音は殆ど聞こえない。

#### iv 遊び方

オーピー夫妻は次のように遊び方を説明している。

2人の遊び手が向き合って立ち、まず自分の両手を叩き、次の相手の右と合わせ、また自分の両手を叩き、相手の左手と自分の左手を合わせ、もう一度自分の両手を叩き、今度は相手の両手と自分の両手をそれぞれ合わせるといった動きを繰り返す。相手の頭が混乱したり消耗したりして間違えるまで、歌うスピードを段々と上げて一連の動作を続ける。<sup>13)</sup> 筆者が授業で使用しているテキストでは、この遊び方が紹介されている。『マザーグースとあそぶ本』では、peaseの部分では自分の両膝をたたき、porridgeの箇所では両手を叩く、hotとcoldを歌う部分では相手と両手を打ち合わせる、in theで相手の右手と自分の右手を合わせ、potとdaysで両手を叩き、nineのところでは相手の左手と自分の左手を合わせ、最後のoldで再び相手と両手を打ち合わせる手遊びが紹介されている。さらに、手の合わせ方は、これ以外にもたくさんあると説明している。

同じオーピー夫妻著の本では、別の遊びも紹介されている。これは最初に手を重ねておいて、各行を歌いながら、一番下にある手を抜いて、重なりが一番上に置いていく遊び方である。<sup>14)</sup> これをベースとした遊びが『うたおう！マザーグース下』において紹介されている。<sup>15)</sup>

授業では、ビデオ教材『Kiddy CAT VIDEO 1993年3月号』で行われているように、第1行では自分の両手を叩く、次に相手の右手と合わせ、もう一度自分の両手を叩いたのち、相手と腰の部分をつつけ合う、第2行では自分の両手を叩き、さらに相手の左手を合わせ、自分の両手を叩いてから、右足をドスンと踏み鳴らす、第3・4行で、自分の両手を叩く、相手の右手と合わせる、自分の両手を叩く、相手の左手と合わせる、自分の両手を叩く、相手の右とハイタッチという動きで実習している。

### C. Ring-a-Ring o'Roses

#### i 曲の概説

薔薇の花の周りを子ども達が手を繋いで回っている様子が想像される歌である。

12) 三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』38-39頁、松澤喜好『英語耳』40-41頁、菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』37頁を参考にしてまとめている。

13) Iona and Peter Opie: *The Oxford Nursery Rhyme Book*, Oxford University Press, 1955, 1985, p.9.

14) Kiddy CAT編集部編『うたおう！マザーグース下』（アルク、2000年）、87頁。

15) ラボ教育センター編『マザーグースとあそぶ本』（ラボ教育センター、1986年）、40-41頁。

この曲は、代表的なring songである。ring songとは、子ども達が手を繋いで輪になり、歌いながら回るものを指す。オーピー夫妻は、「小さな子ども達が手を繋いで輪となれば、自然に唇からすぐに湧き上がってくる歌」<sup>16)</sup>としている。

「くしゃみ」と「倒れる」という表現が時代的な変化を遂げていないことから、この歌が1664年～1665年にかけてのロンドンでの大疫病をモチーフとしているという解釈もあるとオーピー夫妻が懐疑的に「allege（確証もなしに申し立てる）」という語を用いて記している。「薔薇色の発疹」が疫病の症状であり、「薬草の花束」は疫病からの護身用に持ち歩かれたもの、「くしゃみ」が決定的な致死の兆候、そして「皆倒れる」で実際に人々に起きた出来事だとするものである。

また、19世紀や英語圏以外のヴァージョンでは、「fall」が「高い位置から低い位置に移動する」という意味から、身分の高い人に対して尊敬の意を示すために、片方の脚の膝を曲げ、他方の脚を後ろに引き、身を低くするお辞儀や、優美に体を屈める仕草を示しているとする解釈もある。<sup>17)</sup>

ペスト大流行に関係するという解釈は、根拠が希薄であるにも関わらず、広く流布している。このペストが14世紀の黒死病（Black Death）であるか、16世紀の大疫病（Great Plague）であるかも分かれている上に、「本であろうと雑誌記事であろうと、ペスト流行について言及する時には必ずと言ってよいくらいこの唄が引用される」<sup>18)</sup>という指摘もある。

## ii 授業で取り上げている歌詞

Ring-a-ring o'roses, / A pocket3 full4 of posies,  
A-tishoo! A-tishoo! / We all4fall4 down5.

The cows are in the meadow / Lying down and sleeping  
Thunder! Lightening! / All jump up.

(この歌詞は教科書として使用している『子どもとうたおう！マザーグース』に掲載されているものである。その他の歌詞については、注に記す。<sup>19)</sup>)

16) Iona and Peter Opie: *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.364.

17) *Ibid.*, p.365.

18) 藤野紀男『マザーグースのミステリー』18-93頁。

19) 現在2番とされている歌詞は、19世紀に入ってから収集されたものである。

The cows are in the meadow / Lying fast asleep  
A-tishoo! A-tishoo! / We all get up again.

また、その他の歌詞として次のようなものが挙げられる。

A Ring, a ring o'roses, / A pocket full of posies.  
Ash-al! Ash-al! / All stand still.

The king has sent his daughter / To fetch a pail of water,  
Ash-al! Ash-al! / All bow down.

The bird upon the steeple / Sits high above the people,  
Ash-al! Ash-al! / All kneel down.

The wedding bells are ringing, / The boys and girls are singing.  
Ash-al! Ash-al! / All fall down.

Iona and Peter Opie: *The Oxford Nursery Rhyme Book*, p.15より引用。

### iii 歌う際の注意点

①この歌の最大のポイントは、【r】の発音である。【r】の発音は、大きく二つに分けられる。一つは巻き舌を利用するもの、もう一つは特定の母音を発する時の舌の位置を移動させるものである。授業の際には、イメージが掴みやすい巻き舌で説明している。唇を丸く突き出すようにして、舌の先を上歯茎に近づけ、硬口蓋に向けて巻き上げて発音する。初心者向けではあるが、【r】を発音する前に、小さな「ウ」をつけるやり方がある。こうすると、口腔内での舌の移動と共鳴が楽に行える。<sup>20)</sup>

②ring aとring oは、二つの単語の間で発生するリエゾンである。

③pocketの最後の音は【t】という破裂音であり、音の消滅が起きる。

④での【l】の音は既に学習済みの音であるので、再度確認を促すようにしている。

⑤口の中の息の通り道を舌で塞いで、鼻に息を抜いて作る音である。日本語の「ん」の音にならないように注意したい。

### iv 遊び方

教科書では、次のような遊び方が紹介されている。

1番では、皆で手を繋いで輪となり、ぐるぐると回る。「くしゃみ」のところで2回飛び上がり、「We all fall down」のところで倒れる。2番では、まず牛が寝込んでいるポーズを取り、「thunder」の箇所でも2回手を叩き、「lightening」のところで両足を打ち合わせ、最後の「all jump up」で高く飛び上がる。<sup>21)</sup>

また『マザーグースとあそぶ本』では、「くしゃみ」のところまでは、上記と同様に手を繋いで輪となり回り、「くしゃみ」のところで全員静止して繋いだ手を振る、そして最後の箇所では、思い思いの恰好で倒れるとしている。倒れる代わりに、お辞儀をしたりしゃがんだりするパターンも記載されている。<sup>22)</sup>

## D. Hickory, Dickory, Dock

### i 曲の概説

この曲は、教科書として使用している本には収録されていない。だが、手遊びの面白さや歌の中で数を増やしていく面白さのある歌であるため、追加の曲として学習している。

これは、かつては声に出して数を数える時に用いられた歌とされている。ウェストモースランドの羊飼いが羊を数える時に、Hevera (8), Devera (9), Dick (10) と言っていた点との関連を指摘する例もある。また、1821年に出版された*Blackwood's Magazine*には、エディンバラでは、子ども達にとっての「鬼きめ歌 (counting-out rhyme) であり「誰がゲームを始めるか」を決める時に頻繁にこの歌を歌うと書かれているようだ。<sup>23)</sup> また、jingle

20) 三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』16-18頁、松澤喜好『英語耳』85-86頁、菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』49頁を参考にまとめてある。

21) Kiddy CAT編集部編『子どもとうたおう! マザーグース』(アルク、初版2011年、2012年) 34-35頁。

22) ラボ教育センター編『マザーグースとあそぶ本』48-49頁。

23) Iona and Peter Opie ed., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.206.



（調子よく響く短い詩，同音の繰り返し）として分類されている。<sup>24)</sup>

## ii 授業で取り上げている歌詞

Hi<sup>①</sup> ckory Di<sup>①</sup> ckory Dock  
 The mouse ran u<sup>②</sup>p the clock  
 The clock struck one  
 The mouse ran down  
 Hi<sup>①</sup> ckory Di<sup>①</sup> ckory Dock

## iii 歌う際の注意点

①では，【i】の発音上の注意がポイントとなる．英語の【i】の音は，日本語の「イ」に近いが，別の音であるため，日本語の「イ」で代用することは出来ない．コツとしては，日本語の「イ」を短めに発音すること，また，小指を両歯で軽く噛みながら「イ」と発音すると正しい音になることを伝えている．舌の位置は，日本語の「イ」の音を発音する場合よりも，口の中で低い位置となる。<sup>25)</sup>

②では，音の連結を意識する．前の単語が子音nで終わり，次の単語upが母音で始まっているため，音の連結が発生する．

## iv 遊び方

子ども達が手遊びとして行う際は，両手をお祈りする時のように胸の前で合わせHickory Dickory Dockと歌いながら前後に揺らす．The mouse ran up the clockのところでは，右手の人差し指と中指を動かしながら腕を下から上へ持ちあげていき，鼠が時計の振り子を駆け上る様子を示す．そして，The clock struck oneに合わせて，両腕を大きく左右に開いて頭上で拍手を一つする．The mouse ran downでは，ran upとは逆に，右手の指を2本動かしながら鼠が振り子を駆け下りる様子を表し，最後の歌詞Hickory Dickory Dockでは，始まりの部分と同じ動作を繰り返す．歌詞の中で時計が2を打つのであれば頭上での拍手は2回，3回打てば拍手は3回というように回数を唄に合わせて増やしていく。<sup>26)</sup>

子ども達が自ら行う手遊びの他に，大人が低年齢の幼児を遊ばせる歌としても用いられている．大人は幼児を向き合うように体の上に乗せる．大人は，歌詞の1行目・2行目で，人差し指と中指を子どもの足の方から顔の方へと這わせていく．3行目で子どもの鼻をギュッとつまみ，4行目・5行目で指を顔から足に向けて這わせていく．これが遊ばせ歌として紹介されている。<sup>27)</sup>

さらに，大人一人と子ども達とでの遊び方もある．大人が大時計となり，子ども達は鼠になる．大時計役の大人は唄に合わせて，腕を振り子として振る．子ども達は大時計に段々と

24) Iona and Peter Opie ed. *The Oxford Nursery Rhyme Book*, Oxford University Press, 1955, 1984, p.24.

25) 三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』50-51頁，松澤喜好『英語耳』95-96頁，菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』12頁を参考にしてまとめている．

26) Kiddy CAT編集部編『マザーグースとあそぼうよ』（アルク，1988年），26-27頁．

27) ラボ教育センター編『マザーグースとあそぶ本』30頁．

近づいていき、大時計によじ登っていく。The clock struck oneの箇所では大人が手を打つと、鼠たちはびっくりして逃げ出すというものである。<sup>28)</sup>

## E. Humpty Dumpty

### i 曲の概要

ナーサリー・ライムの中でも非常に有名な歌である。元々は、「卵」を答とする謎々であった。しかし、ルイス・キャロル (Lewis Carroll) の『鏡の国のアリス (*Through the Looking-Glass*)』の登場人物として描かれた際に、そのイメージが定着してしまい、もはや謎々として答を求める必要もなくなってしまったとされている。だが、この唄に添えられているイラストは、主に三つに分類されるようで、「卵そのものとして描かれたもの、卵のかたちをした卵人間、そして普通の人間として描かれたもの」<sup>29)</sup>がある。必ず卵に関連したイラストというわけではない。この言葉には、「ずんぐりむっくりの人」「一度損じると元には戻らないもの」という英和辞典に掲載されている意味に加え、「非常に危なっかしい状態」の意味でも用いられる。<sup>30)</sup> 17世紀の終わり頃には、この言葉には「ビールにブランディを混ぜた熱い飲み物」の意味が、その後、“a little humpty dumpty man or woman”というフレーズに「男女に関わらず、小柄でぶかっこうな人間」という意味がOEDに記されている。<sup>31)</sup>

オーピー夫妻は、イギリスの「ハンプティ・ダンプティ」はフランスでは“Boule, boule”デンマークでは“Lille-Trille”, スウェーデンにおいては“Thille Lille”, フィンランドでの“Hillerin-Lillerin”, スイスにおける“Annebadadeli”, さらにドイツでは方言による違いはあるものの“Etje-Papetje”・“Wirgele-Waegle”・“Rüntzelken-Püntzelken”・“Gigele-Gagele”・“Trille Trölle”・“Hümpelken-Pümpelken”等としてヨーロッパの多くの国で広く知られているが、謎々は同じ形態とモチーフであり、イギリスの脚韻 (の踏み方) と関わりがあることは否定できないであろうと述べている。<sup>32)</sup> この点については、「いったんこわれたら、もとへ戻らないという卵の特質を擬人化する唄は、ヨーロッパ各地にみられ、唄の主人公の名こそ違え、その名まえのひびき (卵がごろりごろりと転がる感じを模したもの) から唄の形態や発想までお互いに酷似している。」<sup>33)</sup> という指摘もなされている。

### ii 授業で学習している歌詞

Hu①mp②ty Du③mp④ty sat o⑤n a⑥ wall / Hu①mp②ty Du③mp④ty had a⑤ great fall  
All the king's horses and all the king's⑥men /  
Couldn't put Humpty together a⑥gain

28) Kiddy CAT編集部・編『マザーグースとあそぼうよ』27頁。『マザーグースとあそぶ本』30頁にも同様の遊び方が掲載されている。

29) 藤野紀男・夏目康子『マザーグース・コレクション100』3頁。

30) 鳥山淳子『映画の中のマザーグース』(スクリーンプレイ、1996年初版、2002年)、p.54。

31) “Humpty Dumpty”. *The Oxford English Dictionary*, 1989 ed.

32) Iona and Peter Opie ed., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.215.

33) 平野敬一監修『マザーグース Part (1)』(日本放送出版協会、1994年)、p.8。

### iii 歌う上での注意点

①は短母音の【ʌ】である。日本語の「あ」の音にかなり近い音であるが、日本語よりも少し喉の奥で調音する。そのため、顎を僅かに上に向けながら発音すると、容易に喉の奥から音を出すことが出来る。口の開き方は、咳をする時の形をイメージすると良い。<sup>34)</sup>

②③④は、音の連結である。前の単語が子音で終わり、その次の単語が母音で始まるため、音の連結が起きる。

⑤⑥については、8分の6拍子のリズムに合わせて、テンポよくメロディーに歌詞を乗せていくように歌わないと、歌詞を歌いきることが出来ない。

### iv 遊び方

授業で使用している教科書には、遊び方は示されていない。

オーピー夫妻は、「Humpty Dumpty」と呼ばれる女の子達の遊びを取り上げている。この遊びでは、女の子達は今で言う体育座りをして足をスカートですっぽりと覆う。そして決められた合図で全員が後方へのけぞるようにして転がり、スカートを乱さないまま、元の姿勢に戻るといったものである。<sup>35)</sup> この遊びは、『マザーグースとあそぶ本』には記載が見られる。<sup>36)</sup>

## F. London Bridge is Falling Down

### i 曲の概要

オーピー夫妻は、かなり多くのページをこの曲の解説に費やしている。それによれば、この曲は「絶え間なく建築されなおさなくてはならない不可思議な橋 (a mysterious bridge which must ceaselessly be rebuilt)」と「どこかに尚恐怖の要素が存在しながらもその橋の上で明るく歌を歌いながら遊んでいる子ども達 (children singing lightheartedly as they play a game upon which there still rests an element of fear)」という二つの心象をより深く呼び起こすとしている。採録された歌詞はLondon Bridge is broken down, / broken down, broken down / London Bridge is broken down / My fair lady<sup>37)</sup>である。教科書にも掲載されている「London Bridge is falling down, / falling down, falling down / London Bridge is falling down / My fair lady」という歌詞は、陰鬱で恐ろしい慣例の記憶を失わないようにするための、人気のある、恐らくは唯一の童謡であると言われている。この慣例とは、何度も流されてしまう橋の存続を願いながら超自然的な力と対抗するために夜警が必要であり、その夜警自身に特別な力が備わっていなければならない、そして夜警がその超自然的な力を宿すために、橋を建築する際に人間の犠牲が払われたことだとしている。さらに、フレイザーの『金枝篇』からドイツやギリシア、イギリスの幾つかの橋の例を取り上げ、歌詞の意

34) 三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』25頁、松澤喜好『英語耳』69-70頁、菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』18頁を参考にしてまとめている。

35) Iona and Peter Opie ed, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.215

36) ラボ教育センター編『マザーグースとあそぶ本』54-55頁。

37) Iona and Peter Opie ed, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.272.

味を検証している。<sup>38)</sup> このように、童謡でありながら、橋を建築するための人柱の記憶を留めるといふ、陰を持つ歌として歌い継がれてきた。

## ii 授業で学習している歌詞

London<sup>①</sup> Bridge i<sup>②</sup>s f<sup>③</sup>alling<sup>④</sup> down<sup>①</sup>, / f<sup>③</sup>alling<sup>④</sup> down<sup>①</sup>, f<sup>③</sup>alling<sup>④</sup> down<sup>①</sup>

London<sup>①</sup> Bridge i<sup>②</sup>s f<sup>③</sup>alling<sup>④</sup> down<sup>①</sup> / My f<sup>③</sup>air lady<sup>39)</sup>

## iii 歌い方のポイント

①は【n】の音を、日本語の撥音「ン」の音で代用しないように注意したい。舌先を上歯茎の裏側にしっかりと押しつけ、息が鼻に抜けるように心掛ける。今回は語尾のnを正しく発音したいため、舌先を正しい位置にあて、Londonを発音し終えるようにする。<sup>40)</sup>

②のbridgeの語末は子音で終わり、次の単語はisは母音で始まっているため、音の連結が起きる。

③は特に注意したい箇所である。英語の【f】の音は、現代の日本語音の中には存在していない。そのため、日本人にとっては発音が難しいと音として捉えられることが多い。また、日本語の「ファ」の音とは異なる音として認識することが大切である。この音は基本的には、上の前歯の先を下唇にあて、歯と唇の隙間から息を強く通して発音する。今回の【f】の音

38) *Ibid.*, p.275.

39) この唄の全詞は次のようなものである。

London Bridge is broken down, / Broken down, broken down,  
 London Bridge is broken down, / My fair lady.  
 Build it up with wood and clay, / Wood and clay, wood and clay,  
 Build it up with wood and clay, / My fair lady.  
 Wood and clay will wash away, / Wash away, wash away,  
 Wood and clay will wash away, / My fair lady.  
 Build it up with bricks and mortar, / Bricks and mortar, bricks and mortar,  
 Build it up with bricks and mortar, / My fair lady.  
 Bricks and mortar will not stay, / Will not stay, will not stay,  
 Bricks and mortar will not stay, / My fair lady.  
 Build it up with iron and steel, / Iron and steel, iron and steel,  
 Build it up with iron and steel, / My fair lady.  
 Iron and steel will bend and bow, / Bend and bow, bend and bow,  
 Iron and steel will bend and bow, / My fair lady.  
 Build it up with silver and gold, / Silver and gold, silver and gold,  
 Build it up with silver and gold, / My fair lady.  
 Silver and gold will be stolen away, / Stolen away, stolen away,  
 Silver and gold will be stolen away, / My fair lady.  
 Set a man to watch all night, / Watch all night, watch all night,  
 Set a man to watch all night, / My fair lady.  
 Suppose the man should fall asleep, / Fall asleep, fall asleep,  
 Suppose the man should fall asleep, / My fair lady.  
 Give him a pipe to smoke all night, / Smoke all night, smoke all night,  
 Give him a pipe to smoke all night, / My fair lady.

Iona and Peter Opie ed, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, pp.270-271より引用。

40) 三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』44頁、松澤喜好『英語耳』53-54頁、菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』46頁を参考にしてまとめている。

は、fallingとfairに在り、全て単語の語頭にある音であるため、前歯で下唇を軽く噛みながら、下唇を前方へ弾くようにして出すと良い。<sup>41)</sup>

④fallingという綴りでgの前にnが在るため、発音は【g】ではなく【ŋ】となる。【ŋ】は鼻音であり、喉の奥で【g】の音を破裂させずに息を飲み込むイメージを持てると良い。

#### iv 遊び方

授業では使用している教室の関係から実習出来ないが、くぐり遊びの代表的な歌の一つとして紹介している。くぐり遊びのやり方としては、次のようなものとなる。まず「親」を二人決め、その二人が他の者には分からないように予め「gold」と「silver」のどちらになるかを決めておく。そして、曲を歌いながら、親以外の子ども達は輪となって親が作るアーチの下を潜っていく。節の最後の“My fair lady”のところでは親はアーチを降ろし、その下に来た子どもを捕まえる。そして、捕まった子どもは、他の子どもに聞こえないように小声で「gold」「silver」のどちらかを選び、選んだ親の後ろに並ぶのである。<sup>42)</sup> 筆者が子どもの頃には、日本語で歌い、「金」か「銀」を選ぶという形で、実際にこの遊びを体験していたが、現代の学生で経験した者は殆ど居ない。『マザーグースとあそぶ本』では、このタイプでの遊び方を「組分け型」と分類している。そして、組分けを行った後に「人間綱引き (a tug of war)」を行う。さらに、組分けを行わずに「親」役を交代する「交代型」、捕まった人がアーチになっていく「アーチ増設型」を示している。<sup>43)</sup> オーピー夫妻は、この「人間綱引き」はアメリカでしばしば行われているものの、イギリスでは一般的ではないとしている。<sup>44)</sup> 授業で使用している教科書では、「交代型」が用いられている。

〈続〉

#### \*参考文献

- Opie, Iona and Peter ed., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Oxford University Press, 初版1951年, 1985年.  
 Opie Iona and Peter ed., *The Oxford Nursery Rhyme Book*, Oxford University Press, 初版1955年, 1985年.  
 Rackham, Arthur (Illustrated). *Mother Goose Nursery Rhymes*, Chancellor Press, 初版1913年 (William Heinemann Press), 1985年.  
 The Oxford English Dictionary, 1989 ed.  
 Kiddy CAT編集部編『マザーグースとあそぼうよ』アルク, 1988年.  
 Kiddy CAT編集部編『続マザーグースとあそぼうよ』アルク, 1989年.  
 Kiddy CAT編集部編『マザーグースとあそぼうよ No.3』アルク, 1988年.  
 Kiddy CAT編集部編『うたおう!マザーグース(上)』アルク, 初版2000年, 2001年.  
 Kiddy CAT編集部編『うたおう!マザーグース(上)』アルク, 2000年.  
 Kiddy CAT編集部編『子どもとうたおう!マザーグース』アルク, 初版2011年, 2012年.

41) 三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』45頁, 松澤喜好『英語耳』44-45頁, 菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』39頁を参考にしてまとめている。

42) ラボ教育センター編著『マザーグースとあそぶ本』82-83頁。

43) 同上, 70-71頁。

44) Iona and Peter Opie ed., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, p.275.

ハンフリー・カーペンター、マリ・ブリチャード（神宮輝夫・監修）『オックスフォード世界児童文学百科』原書房、1999年。

定松正・本田英明『英米児童文学辞典』研究社、2001年。

菅原勉監修『Kiddy CAT児童英語教師養成講座 実践英語音声学演習』アルク、1993年。

鳥山淳子『映画の中のマザーグース』スクリーンプレイ、1996年初版、2002年。

藤野紀男『マザーグースのミステリー』ミネルヴァ書房、2009年。

藤野紀男・夏目康子『マザーグース・コレクション100』ミネルヴァ書房、初版2004年、2012年。

松澤喜好『英語耳』アスキー、2004年、2005年。

三宅川正・増山節夫『最新音声学教本』英宝社、初版1971年、1976年。

ラボ教育センター編（山本まつよ・百々佑利子監修）『詩とナーサリー・ライム第1集』テック・ラボ教育センター、初版1983年、1985年。

ラボ教育センター編（山本まつよ・百々佑利子監修）『詩とナーサリー・ライム第2集』テック・ラボ教育センター、1985年。

ラボ教育センター編（山本まつよ・百々佑利子監修）『詩とナーサリー・ライム第3集』テック・ラボ教育センター、1987年。

ラボ教育センター編（百々佑利子監修）『マザーグースとあそぶ本』ラボ教育センター、1986年。